

騎手のピークパフォーマンスに関する質的研究 ーレース中の心理状態に着目してー

松田 育実 (競技スポーツ学科 スポーツ情報戦略コース)
指導教員 豊田 則成

キーワード：騎手，ルーティーン，周囲の支え

1. 緒言

本研究では「騎手はピークパフォーマンスをどのように語るのか」というリサーチクエストジョン (Research Question:以下 RQ と略す) を設定し、質的にアプローチを行い、発展継承可能で有益な仮説的知見を導き出すことを目的とした。

2. 研究方法

インフォーマント (Informant: 情報提供者。以下 Inf. と略す) は、免許取得 14 年目の騎手 1 名とする。Inf. 1 人に 60 分程度の半構造化インタビューを 1 対 1 で実施。質的研究の代表的な手法である、修正版グラウンデッドセオリーアプローチ (Modified Grounded Theory Approach: 以下 M-GTA と略す) を用いて行った。

3. 結果と考察

本研究は、「騎手はピークパフォーマンスをどのように語るのか」という RQ に対して、騎手は「競技への①取り組み方を試行錯誤しながら、生活リズムを作るが②実力発揮できないことに直面し、自己嫌悪に陥ってしまう。しかし、周囲の支えがあり、期待に応えたいという気持ちから③自信を確立させ、実力発揮するが④次の段階へのレベルアップをするために、自分のレースを客観的に見て取り組む。」という仮説的知見を導き出した。

4. まとめ

騎手はピークパフォーマンスによって「次のレースに向けて新たな可能性を広げることができる」といえる。

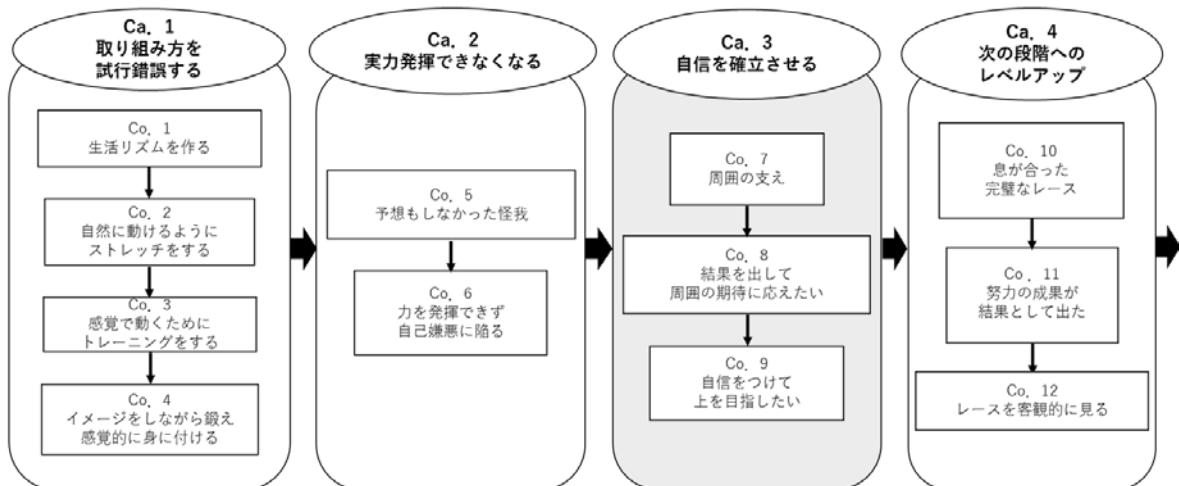


Fig. 1 新たな可能性を導き出すプロセス